

序 文

臨床栄養学は、5大栄養素の代謝、消化・吸収などを学ぶ基礎栄養学、ライフステージ別に適応する栄養学を学ぶ応用栄養学と共に、各種疾患に対応した栄養学として、栄養学の根幹をなしている。

健康と疾病の間が、境界不明瞭な状態で連続している中であって、各種の疾患の発症、予防、治療において栄養学を必要とする比重は極めて高い。中でも臨床栄養学の知識は、疾患と直接結びついているため重要である。

古くは、高木兼寛による、軍艦を用いて白米、玄米を別々に投与して、脚気の予防に玄米が有効であるとした研究に始まり、多くのビタミン欠乏症の解明と共に栄養学は発展し、基礎栄養学、応用栄養学、臨床栄養学へと分化してきた。こうした中で、時代は栄養不足から栄養過剰へ、疾患も結核などの感染症、脚気などのビタミン欠乏症の時代から、高脂血症、糖尿病、肥満など栄養過剰を原因とするいわゆる生活習慣病の時代へと変化してきている。

このような時代の変化、時代のニーズに合わせて、臨床栄養学そのものも変化が求められてきている。これまでの臨床栄養学は、どちらかという医師による疾病の成因や症状などの説明が主体であった。しかし、疾病の変化、多彩さは、管理栄養士と医師を中心とするチーム医療の必要性を求めている。同時に、このニーズに応えるため管理栄養士には臨床に関する幅広い知識が求められている。

本書は、以上のような管理栄養士のニーズに応じて、また平成14年の栄養士法の改正を受けて、栄養ケア、栄養マネジメント、食品と医薬品の相互作用などを含め、臨床栄養学を幅広い視点から学べる構成になっている。同時に、管理栄養士コースで学んでいる学生のみならず、大学院生、すでに活躍している管理栄養士も利用できるよう、日々進歩している最新の臨床栄養学の内容を含んだものとなっている。本書が臨床栄養学を学ぶときのバイブルとなることを願っている。

最後に、本書の企画、編集を担当された第一出版小ノ沢睦美部長に厚く御礼申し上げます。

平成17年2月

編 者